

「教育臨床総合研究紀要 4 2005研究」

## 教員養成学部における「地誌学概説」授業改善の試み

The Study on Improvement of Lectures on “Regional Geography”  
in Faculty of Teacher Training

作 野 広 和\*  
Hirokazu SAKUNO

[キーワード] 教員養成学部、伝統的な地誌学、新しい地誌学、授業改善

### 問題の所在と研究の目的

社会が高度化・複雑化した結果、学問に対しては統合化・総合化が求められている。それにもかかわらず、その構造を解明しようとする諸科学は細分化が進むジレンマに陥っている。地理学は20世紀を通じて、伝統的な地誌学<sup>1)</sup>の推進によって総合的な学問として存在してきたため、この問題は一層深刻なものとなっている。しかしながら、地理学が有するこうしたジレンマに対し、わが国の学校教育においては「地誌重視」という結論が明快に示されている(中山、1997)。すなわち、伝統的な地誌学のプラス面にのみ注目し、地誌学が持つ問題点を認めつつも、その問題には目を背けていると言わざるをえない。こうした構造は戦後社会科に地理が組み込まれて以来、若干の改善への取り組みはあるものの、大きく変化はしていない。

中学校社会科および高等学校地理歴史科(以下、総称して「社会科」とする)教育において、どのような地理的内容を学ぶべきか、あるいは学界において指摘されている地理学と地誌学の関係に関する議論をどのように学校教育に反映させるのかについて、本稿で論ずるにはあまりにも課題が大きい<sup>2)</sup>。むしろ、ここで問題としたいのは、学校現場で担う社会科教員を養成する教員養成学部における地誌教育ないしは地誌学教育について、十分な研究がなされていない点である。

教員免許法では中学校社会科および高等学校地理歴史科において地誌<sup>3)</sup>は必修科目として扱われている。広義の地理学が幅広い分野をテリトリーにしているにもかかわらず、いわゆる系統地理学については「地理学」(中学校)ないしは「人文地理学および自然地理学」(高等学校)と示されて

第1表 中学校「社会」・高等学校「地理歴史」  
教員免許状取得に必要な教科に関する科目

学校種	教科	科目
中学校	社会	日本史及び外国史 地理学(地誌を含む。) 「法律学、政治学」 「社会学、経済学」 「哲学、倫理学、宗教学」
高等学校	地理歴史	日本史 外国史 人文地理学及び自然地理学 地誌

\* 島根大学教育学部

いるに過ぎない(第1表)。これに対して、地誌学は中学校の免許科目において「地理学(地誌を含む)」とされ、広義の地理学に地誌が含まれていることが明記されている。また、高等学校に至っては「人文地理学および自然地理学」と対等な科目として「地誌」があげられている。このことは、学校教育における地理教育がどのような構造で行われようとしているのかを明確に示している。すなわち、中学校における「地理学(地誌を含む)」という表現から、学校教育における地理教育においては地誌を欠くことのできない必須の内容であることを示している。また、高等学校における地理教育は地理学という名の下に人文地理学と自然地理学から構成される系統地理学と地誌の二本立てで行っていくべきだとの姿勢がうかがえる。このように、学校教育における地理教育は「地誌重視」の姿勢が明白である。

これに対して、アカデミックな地理学において地誌学を専門とする研究者が極めて少ない点は周知の通りである。また、地理学の存亡を危惧して、地誌学の重要性を強調すべきだとする見解もいくつか示されている。地理学におけるこうした問題点が議論されて久しいが、未だに明確な解決策は示されていない。その結果、わが国の教員養成系学部および中学校社会・高等学校地理歴史の教員免許状の取得可能な学部において、「地誌学」と名の付く授業は旧態依然とした発想にもとづいて行われていることが多い。免許科目に含まれる授業題目については文部科学省の審査などもあるため授業題目のダイナミックな変更は難しいと思われる。しかし、その内容については地理学・地誌学が社会から解決を要請された問題について多少なりとも答えていく必要があることは言うまでもない<sup>4)</sup>。しかし、実態は後述するような伝統的な地誌学に関する授業が行われている場合が多い。伝統的な地誌学が不要だということではないが、地誌学の位置づけや授業内容について再検討を行い、その授業改善を行う必要があることは明白である。

そこで、本稿では上述した地理学および地誌学が有する問題点を踏まえ、教員養成学部における地誌学の授業の改善例を提示する。これにより、「伝統的な地誌学」にもとづく地誌学授業の功罪を検証するとともに、時代の要請に答えることが可能な新たな地誌学授業の提案を試みたい。また、学校教育の地理教育が担う教員の必要な資質や能力についても検討を行いたい。なお、本稿は地誌学の授業内容や授業方法の改善を提案するものであるが、このことはFD(ファカルティ・ディベロップメント)に直結するものである。本稿はそうした観点からの検討も行う。

## 「地誌学概説」の位置づけと授業内容

### 1. 従来の「地誌」関連科目の問題点

1999年に教員免許法が大きく改正された結果、社会科のみならず全ての教科における教科に関する科目の必須単位数が大幅に削減された。改正される以前の教員養成系大学・学部や、私立大学を中心とした地理学科を有する大学・学部では地誌学関連の授業は4～7科目開講されている場合が多数を占めた。しかし、教員免許法が改定された以降は「日本地誌」と「外国地誌」の2科目4単位を開講し、これらを必須としている大学・学部が多くなった。これは、教員免許法において、中学校社会では「地理学(地誌を含む)」という科目で1単位以上の修得

が義務づけられているに過ぎないため、どの教員養成学部においても「地誌」関連科目の縮小を余儀なくされたのである。ちなみに、「地誌」単独の授業を開講しなくても「地理学（地誌を含む）」という授業科目であれば文部科学省は課程認定を行っている。

こうした時代において、本学部でも「地誌」関連科目は1科目2単位のみが必修となっている。また、地誌以外の科目については自然地理学と人文地理学のそれぞれ2単位ずつが必修となっている。このように、社会科の免許を取得する学生であっても、地理学に関する科目は3科目6単位のみを学んで中学校や高等学校の教壇に立つことになる。

教員養成学部における「地誌」関連科目は、フィールドワークの手法を教授する実習授業を除いては、大半が特定の地域の地域像を教授する例が多い。厳密な調査を行ってはいないが、各大学のシラバスを検索すると、「外国地誌（オーストラリア地誌）」といった表現がなされている例が多い。このことは、系統地理学と地誌学の関係について、ハーツホーンに代表されるような伝統的な見方を前提としていることがうかがえる。そうした授業において、いわゆる新しい地誌学に答えている可能性は低い。このことは、地理学研究者が伝統的な地誌学を批判しながらも、教育現場においては旧態依然とした伝統的な地誌学の授業を行っていることを端的に示している<sup>5)</sup>。

前述したように、本学部で社会科免許を取得する者の大半は「地誌」関連科目として「地誌学概説」2単位のみを取得する。そこで、筆者は伝統的な地誌学の存在を認めつつも、それに対する問題点を整理し、なぜこのような問題を抱えたまま全国の教員養成学部において旧態依然とした授業が行われているのかについて、学生自身が考える授業を行うこととした。そのためには、伝統的な地誌学にもとづいた旧来型の地誌授業も理解する必要がある。一方、こうした伝統的な地誌学をベースとした社会科ないしは地理教育が行われた結果、「覚える」社会科・地理が横行し、全国各地で「社会科嫌い」「地理嫌い」が生まれた経緯を学習することとした。そして、「覚える」社会科・地理ではない、真に必要とされる学習とは何かを考える際に、新しい地誌学の可能性をさぐる授業を計画した。

あわせて、限られた時間の中で地誌的技法の修得を図るため、野外での体験的活動を導入するとともに、「地誌書」を作成することにより、授業の達成感や満足感が得られる工夫を行った。

## 2. 授業計画

授業は5つのユニットに分けて段階的に実行した（第2表）。

第1ユニットは「地誌学入門」で地理学の体系、地誌学と地理学の関係、伝統的地誌の存在意義について講義形式で検討した。後に示す授業展開例は第1ユニットの第2時間目である。

第2ユニットは「地域調査の基礎」とした。これは、第3ユニットで作成する伝統的地誌書の対象市町村について具体的な地域調査を行う技法について学習するユニットである。具体的には地域調査の項目を整理したり、地域調査の方法に関する実践力を身に付ける。ここで得た地域調査の技法は第3ユニットの「地誌書の作成」で実際に活用した。

第3ユニットでは伝統的地誌の象徴である「地誌書」を自らの手で作成した。その原稿づくりにおいては既存の統計や文献を活用することはもちろんのこと、市町村役場や関係諸機関に

第2表 2002年度島根大学教育学部「地誌学概説」授業計画

時間	月日	ユニット	授業内容	課題・備考
1	9月30日	地誌学入門	ガイダンス	
2	10月7日	地誌学入門	地理学と地誌学	
3	10月14日	地誌学入門	伝統的地誌の存在意義	課題1：伝統的地誌評価レポート (10点)
4	10月21日	地域調査の基礎	地誌的調査の基礎	
5	10月28日	地域調査の基礎	地誌的調査の実践	
6	11月4日	地域調査の基礎	事例対象地域の概要	
7	11月8日	野外活動	広瀬町エクスカーション	課題2：広瀬町エクスカーション (20点)
8	11月11日	地誌書の作成	伝統的地誌書の作成	
9	11月18日	地誌書の作成	伝統的地誌学の実践と反省	課題3：伝統的地誌書の作成 (20点)
10	11月25日	地誌書の作成	地誌の萌芽	
11	12月2日	地誌学史	郷土地理と地誌	
12	12月9日	地誌学史	戦時体制下の地理学・地誌学	
13	1月14日	地誌学史	戦後日本の地理教育	
14	1月20日	学校教育地誌	学校教育における地誌	
15	1月27日	学校教育地誌	新しい地誌学の構築に向けて	課題4：新しい地誌学の提示 (20点)

対する資料請求や訪問聞き取り調査を必須とした。こうして作成された「地誌書」の原稿は授業者によって2回の修正要求がなされ、最終原稿は印刷・製本され、1冊の「地誌書」として刊行した。

また、第2ユニットと第3ユニットの間では「地誌書」の対象とする市町村に赴き、日帰りのエクスカーション(巡検)を実施した。エクスカーションでは対象地域における特徴的な事象について共通理解を深め、事象に対してディスカッションを行った。

第4ユニットは再び講義授業に戻り、地誌が学校教育の中心となったプロセスを学史的に検証した。また、戦後研究者は系統地理学に傾斜していき、学校教育の「地理」とアカデミックな「地理学」が乖離した結果、社会において「地理学」が極めてマイナーな存在となったことを検証した。

第5ユニットは「学校教育地誌」と称し、今日における学校教育地理のあり方を検証するとともに、「新しい地誌学」のあり方についても議論を重ねていった。第5ユニットの最後には「伝統的地誌学」の功罪と「新しい地誌学」のあり方について、ワークショップ形式でディスカッションも実施した。

### 3. 評価計画

まず、本授業は全時間の出席を前提として展開した。そのため、公的に認められた欠席以外は原則として認めない姿勢で行った。ただし、病欠や大会等の行事があることも勘案し、欠席を最高3回までは認め(その場合でも欠席理由証明書を義務づける)、4回以上欠席した場合には自動的に未修とする措置を講じた。

こうして、欠席4回未満の学生を評価の対象とした。評価は客観的評価を行う観点から点数評価としたが、試験は行わずユニット単位のレポート等(ただし、第4ユニットと第5ユニットは合同)、授業時の小テストによって評価した。点数は次の通りとした。

ユニット単位のレポート等	1 回目	: 10点 × 1 = 10点	
	2 回目以降	: 20点 × 3 = 60点	合計 : 70点
授業時の小テスト	2 点 × 12	= 24点	総合計 : 94点

これに、評価対象基礎点として6点を加算し、合計100点満点で80点以上を優、70点以上を良、60点以上を可と評価した。

## 受講生の概要

地理学関係科目は受講生の大半にとってなじみの薄い、苦手意識を持つ分野であると考えられる。実際、高等学校で「地理」を選択した学生はおおよそ2割に過ぎず、多くの学生が高等学校時代のブランクを気にしている。学生たちの地理学関係科目に対する印象は「高等学校時代に習っていないから苦手」「中学校以降、接触していながら興味がわからない」といった要素が支配的である<sup>6)</sup>。これは、高等学校において「地理」選択者が少ないことも大きな要因であるが、教育学部学生においては社会科教育選修の学生に「地理」選択者が少ないことに問題がある。小学校にせよ、中学校にせよ、「地理が嫌い」「地理が苦手」な教員を育てていることは看過できない。ちなみに、「地理」選択者は理科教育や家政教育選修の学生に多いという皮肉な結果もみられる<sup>7)</sup>。この結果、社会科教育選修学生に限って言えば、「地理嫌い」が社会科教員を目指しており、地理学担当者としては複雑な思いをしている。なお、社会科教育選修で希望が多いのは歴史的分野である。このことは全国的な傾向であり、社会科教員を志望する学生の「地理嫌い・歴史好き」の構図は相当根深い。こうした問題が「なぜおこったか」という課題を解明することも、本授業において学生に問いかけていった事項である。

さて、当該年度の実生は11名で極めて少なかった。こうした実生が少なくなった背景は前述の通りである。11名の学生のうち、社会科教育選修2年生が7名と大半である。この他、社会科教育選修3年生が1名、4年生が1名、他教科選修2年生が1名、3年生が1名である。これらは男子学生7名、女子学生4名で構成されている。

実生は一般的に明るく、積極的に授業に参加しようとしている。ただし、上述した「地理好き」は少なく、事前アンケートで調べたところ、地理が「とても好き」または「好き」と答えた学生3名のみであった。しかし、地理が「嫌い」と答えた学生は2名のみであり、「ふつう」と答えた学生が5名であった。本授業の実生に限ってみれば、極端な「地理嫌い」は存在していないことがうかがえる。

## 具体的な授業改善策

### 1. 学生の参加意欲向上に関する事項

#### 1) 学生アンケート・授業記録（「受講者ノート」）の活用

前述したように、当該学期の授業開始時に学生に対して注5で示したようなアンケート調査

を行い、その結果を授業に反映させることにより、学生に対する説明責任を果たした。

また、大橋（1998）を参考にした授業記録（「受講者ノート」）を毎授業後に書かせることにより、授業内容のまとめ、疑問点の整理、書面による質問、自主学习への誘導などの効果をねらった。

## 2) 学習課題の明確化

詳細な授業計画、数時間単位の授業予定、毎時間単位のレジュメ作成により、学習課題を明確化し、受講生の学習内容を整理することにより、系統だった学習を行うことを意識した。

## 3) 学校教育および日常生活との関係性の提示

本授業「地誌学概説」を小・中・高等学校の教育と切り離さず、絶えず学校教育を意識した内容とすることにより、教員養成系学部における授業としての特徴を見いだした。また、日常生活、一般社会の中に本授業を位置づけ、本授業を受講することが「社会的にどのような意味があり」「何が得か」について、絶えず情報を流すことを意識した。

## 4) 具体的成果物「地誌書」の作成

受講生が受講した証拠を残し、他受講生と学習内容を共有するために、具体的成果物を作成することを試みた。具体的には伝統的地誌学観に基づいた市町村誌を作成することにより、伝統的な地誌学の意義と問題点を体感的に学ぶこととした。

2002年度は島根県能義郡広瀬町（現在は安来市広瀬町）を対象に地誌書を作成した。完成した地誌書は受講生全員に配布するとともに、関係各位に配布した。これにより、大学における教育内容を広く社会に公開できると考える。また、社会において学生の努力を正当に評価して頂くことにより、学生の達成感を満たすと考えた。

### 第3表 2002年度島根大学教育学部「地誌学概説」の展開計画

#### 第2回 地誌学入門（2）「地理学と地誌学」展開計画

授業者：作野広和

時刻	項目	教員の活動	学生の活動	留意点
10:30	導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業公開の通知</li> <li>地名テストの実施</li> <li>地名テストの解答</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地名テスト</li> <li>地名テストの自己採点</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>合格点未満の指導</li> </ul>
10:40	復習 (15分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業アンケート結果の紹介</li> <li>受講者ノートの読み上げ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>受講者同士で意見を共有する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業へのゆるやかな導入を図る</li> </ul>
10:55	展開1 (25分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会が見る地理学とは？</li> <li>地理学を志した学生が導かれる四つの方向</li> <li>地誌学と系統地理学の関係</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料から地理学の位置づけを明確化する</li> <li>地誌の総合性を理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>マンガを導入した効果を検証する</li> </ul>
11:20	展開2 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>地理学と地誌学の関係</li> <li>系統地理学と地誌学の関係</li> <li>系統地理学の中心に位置づけられる地誌</li> <li>地誌学の概念の発達</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ベリーの地理行列について正確に理解する</li> <li>地誌学の概念の発達について正確に理解する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地誌学と系統地理学との関係の意識化</li> <li>知識理解の側面をあえて強調する</li> </ul>
11:50	整理 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時のまとめ</li> <li>受講者ノートの記入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>新聞記事を朗読する</li> <li>受講者ノートの記入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>落ち着いて書ける時間を確保する</li> </ul>

## 2. 授業方法に関する事項

### 1) 地図を用いることによる地域の共通認識

地理学において中心的教材となり得る地図を用いて地域に対する共通理解を促進した。また、地形図の読解を授業に組み込むことにより、地図読解に関する基本的技術の向上を図った。

### 2) 野外活動（フィールドワーク）の実施

授業時間数は限られているが、期間中に1回の野外活動（フィールドワーク）を行った。具体的には伝統的地誌書を作成した広瀬町に訪れ、対象地域の概要を把握するとともに、授業参加者による問題意識を明確化する手助けとした。こうした体験的な学習を通して、学生による授業への参加意識を高めるとともに、目的意識を持たせる効果をねらった。

## 3. 授業の展開例

島根大学教育学部のFD研修の一環として公開した授業の内容について紹介する。

公開した授業は第1ユニット「地誌学入門」の2時間目「地理学と地誌学」とした。1時間目で「地域イメージの形成過程」と「地理学の体系」について学んでいたが、本時では地誌学の位置づけについて正確に把握することを目的とした。授業展開は第3表に示す。

まず、地名テストを実施したり、受講者ノートの報告を行うなどして授業の雰囲気づくりや、前時の復習、本時への導入を図った。続いて、展開1においては「社会が見る地理学とは？」と称して、社会の目からみた地理学の評価や地誌学の位置づけについて検討した。さらに、展開2においては「地理学と地誌学の関係」と称して、系統地理学と地誌学との関係を2種類の図を通して検討していった。最後に古代ギリシャ時代に起源を持つ地理学の2つの潮流を提示し、「伝統的地誌学の存在」と「新しい地誌学」の可能性について検討した。

### おわりに

「地誌学とは何か」について説明することは「地理学とは何か」を説明することより難しい。中山（1997）によれば地誌学の発展なくしては地理学の存続の見込みはないとしている。一方で、地誌学をないがしろにしたからこそ今日の地理学の衰退があったと確信している。同時に、今日の学校教育における「社会科嫌い」「地理嫌い」を生み出したのは間違いなく「地理」と称した「地誌」に偏った学習内容だ。「地誌学」ならびに「地誌」をどのように再構築していくか、現代に生きる地理学研究者に課せられた大きな課題である。

本稿では教員養成学部において無批判に受け入れられてきた地誌学関連授業のあり方を検討し、その改善案を提示した。本稿で示した考え方の妥当性については引き続き検討の余地はあると思われる。しかしながら、アカデミック地理学における系統地理学偏重に対し、学校教育における地誌学偏重というギャップをいつまでも見過ごす訳にはいかない。今後もこうした地誌学関連授業のあり方に関する提案がなされるべきであるし、同時に授業内容についてもいっそうの検討が必要だと思われる。

## 付 記

本稿は2002年度の島根大学教育学部学术交流委員会が主管したFDの一環として行われた「授業公開」を契機としてまとめたものである。諸般の都合により、「授業公開」から3年後の報告となった点をお許し頂きたい。「授業公開」にあたっては当時の学术交流委員会委員長の野村律夫先生、同委員の河添達也先生をはじめ委員の先生方に授業に関して有益なアドバイスを頂いた。記してお礼申し上げます。

## 注

- 1) 「伝統的な地誌学」という表現は必ずしも定着しているとはいえない。しかし、1980年代には英語圏地理学において「新しい地誌学 (New Regional Geography)」が大きな潮流となり、従来の地誌学を批判した上での展開であった。本稿ではこの「新しい地誌学」と対比する意味で、それ以前の記述的、静態的な地誌学を「伝統的な地誌学」と標記する。なお、こうした経緯については森川 (2004) に詳しく記されている。
- 2) こうした問題に対しては日本地理学会、日本地理教育学会をはじめ多くの学会でシンポジウムなどが再三行われ、問題点の指摘が行われている。しかし、残念ながら問題の解決には至っていない。
- 3) 本来、「地誌」と「地誌学」は厳密に異なった意味として用いる必要がある。しかし、本稿では紙面の都合でそうした問題に言及する余裕がない。そこで、原則として学校教育における地誌的内容や免許法科目を指す場合には「地誌」と表記し、アカデミックな地理学の主要な分野として「地誌学」と表記する。
- 4) こうした問題についてはわが国の地理学界においても多くの議論がなされてきた。たとえば、1995年には広島大学総合地誌研究資料センターが主催してシンポジウム「地誌学とエリアスタディ - 現状と課題 -」が行われ、その成果は「地誌研年報」第5号として8本の論文および総合討論の内容が記されている。
- 5) 大学によっては系統地理学 (人文地理学) の授業において、伝統的な地誌学の授業を行っている例もあるようだ。辻原 (2005) は某大学で人文地理学の授業においてロンドンの歴史と都市概論を1年間にわたって授業を行った例を示している。
- 6) 「地理」へのなじみ度、高等学校における「地理」の選択度、大学における地理学関連科目の履修状況については、第1回目の授業時にアンケート形式で学生に問い、授業者は把握している。
- 7) 島根大学教育学部資料 (部外秘) による。

## 文 献

- 大橋忠正 (1998) : 「中等社会科教育法」教育の授業方法に関する研究 - 「受講者ノート」の活用を中心として - . 高知大学教育学部研究報告第1部, no.55, pp.1~19.
- 辻原康夫 (2005) : 地理学は時代と向き合っているか. 地図の学際 (東京カートグラフィック株式会社), no.5, p.6.
- 中山修一 (1997) : 『近・現代日本における地誌と地理教育の展開』広島大学総合地誌研究資料センター, 72p.
- 森川 洋 (2004) : 『人文地理学の発展 - 英語圏とドイツ語圏との比較研究 - 』古今書院, 216p.